



「山の端にかかる満月」撮影／中田昭

古典の日絵巻 第七卷

きものがたり

第四号 平成30年7月1日 京の月

京の月
 中田昭の月
 我が家の南西のテラスから月が通る道だ。
 三ヶ月も満月も望みりか 雲とたわむれる月
 も景晴らしい。
 折々 東山を 天空に くらげくられ
 る月のなかを月を見つめ なるしよた。い
 がかりしよもこの月のなかを月見 折を遠
 い中国の大地にはこんどくわす。
 一九四五年。折々一家は 中国 上海へと
 日本に帰ろうとしていた。
 太平洋戦争は すむに終戦を 告ぐとい
 ることも子供達も知らなかった。
 折々手放は 汽車。中国大陸 遼川の十三
 日間の旅とつづいた。
 父は会社の残務整理のため 家族を 北京
 まで送る再心 上海へ帰らわげ かりか
 った。
 それぞれのハリウッドのサウスイーランドの旅。折々の
 リンダは文房具・戒指表・着替 衾巻きと
 手紙。うわが折のすべての紙差だった。
 上海から南京へ ひとりで 北京とめぐり。

長江へ揚子江へ海のよりに去く 岸をい
大きな波が龍のようにながれそつた。

徐州を去り何時間たつたのかわからず
銃掃射であらうな。

列車は急停車をうたまたま 動かさない。我
事には人があつたのだ。

陽は落ちて遠くを打つ。雷の音。砂を巻きこ
んで強い風が空を打つ。雷の音。大陸は断た
れてきた(着いた)。

家族四人の最後の夜 父はあつた 母を
送つたあと一人ひと海へ帰る。

眠れない夜がまた 夜は 夜は 夜は
あつた。

大隈の地帯 砲の音 父は 母は 母は
脈を打つ 鴨子 鴨子 鴨子 鴨子 鴨子

アムステルダムのこと 鴨子 鴨子 鴨子
鴨子 鴨子 鴨子 鴨子 鴨子

子守歌をのせて 鴨子 鴨子 鴨子
鴨子 鴨子 鴨子 鴨子 鴨子

無名月と 月は残る

ホームに立つ父の姿は 私の涙で
消えた

母を失った一年後 父は仲間として 又
この家族に帰った。

川を渡る月があつた。
私の記憶は 父の仲間が 誰か
かえらう。

天皇にささげたる 政官 (紫林子城) に
あつた月も 徐州で 危機を
迎えた。

そして今 東京の町に
あつた月も 天皇に
ささげらる。

我が家の南西のテラスが月の通る道だ。

三ヶ月も満月も美しいが 雲とたわむれる月も素晴らしい。

私は 東山から 天空に くりひろげられる月のたわむれを見るのが たのしみだ。いずれにしてもこの月のたわむれは 私を遠い中国の土地にはこんでくれる。

一九四五年。私達一家は 中国、上海から日本に帰ろうとしていた。

太平洋戦争は すでに終焉を むかえていることを子供達も知っていた。

移動手段は 汽車。中国大陸 縦断の十三日間の旅となった。

父は会社の残務整理のため 家族を 北京まで送って再び 上海へ帰らねば ならなかった。

それぞれがリュックサックひとつの旅。私のリュックには文房具、成績表、着替、衿巻きと手袋、これが私のすべての財産だった。

上海から南京 そして 北京をめざす。

長江(揚子江)へ。海のように広く 茶色い大きな波が龍のようにうねっていた。

徐州を出て何時間たったのか 突然機銃掃射(※-1)でおこされた。

列車は急停車をしたまま 動かない。機関車に穴があいたのだ。

陽は落ちて漆黒の闇の世界、砂を巻きこんだ強い風が窓を打つ。恐怖の 大陸縦断にたえて北京へ着いた。

家族四人の最後の夜 父はあした 私達を送ったあと一人で上海へ帰る。

眠れない夜があけて 私達は北京駅にむかった。

大混雑の北京駅のホームで 父はほかほかの豚饅頭を帽子いっぱい買って来て私たちに渡した。

「お母さんの言うことをよく聞くんだよ」

特別列車 興亜(こうあ) は静かにホームをはなれた。

子等をのせて 興亜はた発てり燕京(えんけい)に(※-2)

寒暁月と 我は残れる(※-3)

ホームに立つ父の姿は 私の涙ですぐに消えた。

北京駅から一年後、父は帰国して 又 ひとつの家族になった。

いろんな月があった。

私の記憶は あの帰国の旅とともに よみがえる。

天空にさえわたる 故宮(紫禁城)にかかった月も 徐州で 危機を迎えた時も そして今 京の町にひたすら 天空に冴える月も 過ぎ去った日の小さなまぼろしだ。

(※-1)機銃掃射…機関銃で敵をなぎ払うように射撃すること(wikipediaより)

(※-2)燕京…北京のこと

(※-3)寒暁月…凍てつくような冬の夜明け前に出る月です